

八木健に学ぶ滑稽俳句 1

高橋 素子

私が俳句を始めたのは、平成十七年の春、娘・真紀子が朝日新聞・松山総局に記者として赴任、「NHK俳句王国の司会者」として有名な八木健氏に出会い、朝日新聞愛媛版に、「マキコの俳句修行」という記事を連載したことに始まる。平成十九年の春、娘のこの連載記事は、師匠・八木健監修のもと「俳句のツボ」の書名で平凡社から出版され、その縁で、師匠・八木健氏に、私もこの「ツボ」をご教授戴けることになった。平成二十年八月の「滑稽俳句協会」発足の一年前のことである。師匠から教えて戴いた、この俳句づくりの大事なポイントは、「八木健に学ぶ滑稽俳句修行」と題して、現在「俳句新聞（万葉の会・代表黒田青磁）」に執筆中であるが、他の誰も教えてくれなかったこの「師匠の俳句の極意」を、復習の意味をこめ、この紙面をお借りして協会員の皆様方にもお伝えしたい。拙い私の文章であるが、最後までお付き合い戴ければ、幸いである。

正岡子規の弟子の佐藤紅緑が明治三十四年に「滑稽俳句集」を出版して以来、失われたままになっていた「滑稽」を取り戻そうと、師匠・八木健が、滑稽俳句集「平成の滑稽」（本阿弥書店）を出版した。平成二十年の秋、百七年ぶりのことであつた。多くの俳人が、滑稽句を作りたいと思っているのだが、なかなか出来ない。滑稽句はそれ程難しく、それだけに魅力あるものである。かく言う私も、六年前から師匠に学びつつ、滑稽俳句作りに挑戦しているが、実を言うと七転八倒の日々である。そこで、私の滑稽俳句修行をここに展開してみたい。

まず始めに、滑稽句の作り方と従来の伝統的な俳句の作り方の違いはど

ここにあるか追求してみよう。

従来の俳句の作り方は、「一物仕立て」と「取り合わせ」の二種類しかないとされている。

滑稽俳句も俳句である以上、季語を持ち十七音字の詩であることに違いないが、滑稽句は私の見たところ二種類に当てはまらないものが多く、多才な語り口である。その作句者の頭に浮かんだ滑稽の感動が、口から転がり出た様なものであることが分かって来た。滑稽の「滑」は、なめらかに口を出る軽みの言葉であり、「稽」は、おかしみそのものである。師匠の句に例えれば、

新玉や見覚えのある猫に会ふ

健

がある。新玉は新年の季語であり、顔見知りの猫を見付けて、あらタマ？と言ったおかし味のある句でもある。地口のおかし味、面白さを表面に出した句であり、講演会で、しかつめらしい顔でこの句を吟詠した後で、人懐こい笑顔の師匠が、あらタマ？とやる時、会場がどっと沸く「言葉遊びの句」でもある。

この「言葉遊び・地口」そのものが、滑稽俳句を作る上での大きなテーマのひとつとなるので、今少し、この種の滑稽俳句を、分析・鑑賞してみたい。

なつかしのお味噌が届き年の暮

健

これも同じような地口の句であるが、前句より一段と駄洒落は機智に富む。忙しい年の暮、田舎から送られて来たお味噌に年老いた両親を思い、幼き日を懐かしむ作句者の心情に、つい胸の熱くなる一句でもある。ところが、おゝ味噌か？（大晦日）という地口の言葉に、会場はまたまた笑いの渦に包まれる。そうして聴衆は、すっかり自分も一端の滑稽俳人になれる様な気持ちにさせられてしまうのである。

ところが、可笑しさと哀しみの同居するこのような滑稽句は、そんなに簡単には作れるものではない。しかも奥は深く、これは、師匠・八木健の滑稽句の作句上でのほんの入り口にしかすぎないのだ。

昔、俳句の上達の秘訣を師匠に尋ねたことがある。「朝から晩まで五七五で喋る。これが一番です。買い物に行っても『八百屋さん大根一本下さいな』『父ちゃんがふろふき大根すきなんで』。すると、八百さんが『奥さんの脚より太い、さあどうぞ！』なんてね」と駄洒落好きな師匠。簡単なようだが指折り真似しても、この技さえなかなか難しい。

ところで、師匠・八木健が俳句王国時代から現在に至るまでに詠んだ句の数は約五千句。一茶の二万句には程遠いが、芭蕉の一千句、蕪村三千句に決して引けを取らない。そこで、これら師匠の句を鑑賞・分析し、過去の名句と比較する事で、滑稽句の真髄に迫りたいと考えている。

道を問ふ手にたんぽぽの絮まるく 健

父の馬まだ駆けて来ぬ草競馬 健

蛇捕りにはなれ少年立ちにけり 健

ふかし諸戸棚に残し母は田に 健

石焼諸父のかばんををどり出て 健

「少年」と題するこれら一連の句は、師匠の比較的初期の作品であるが、心に沁みる感動句となっている。

感動句のポイントは、①句の中に作者が存在している、②内容をしっかり見てそのものの声が聞こえる、③内容に詩がある、④季語を感動で捉えている、という四点。特に③内容に詩があることが、感動句を詠む上での一番大切な心得。「詩」とは、「心が酔う」ことの出来る感動の一種なのですとは、師匠の言葉である。「一所懸命作ったのに、詩がないと言われては、たまったものではありませんからね。もっとも、サラリーマンは、大抵『しがない』ものですが…」と、最後は煙に巻かれてしまったが…。